

カガイシヤの内のヒガイを消し尽くす修正「セクハラ」テープの長さ 大野道夫

大学の委員としてセクハラ防止委員会の会議に出席している場面らしい。やや分かりにくいのが、黒白をはっきりさせるために、加害者を一方的に悪者にするようにテープが修正されている、その不自然さを告発している作と読んだ。短歌にしにくいところを、よく取材したと思う。こういう新素材に挑戦する営為に注目したい。

「ミドリって森のことかい？」恐らくはそう聞かれつつ旅券返さる 笹本碧

マレーシア空港の入国審査での会話に取材したらしい。ローマ字で書かれた「Midori」を見て、職員が問うたのである。小さな出来事に取材しながら、旅の歌として巧み。

人形の義眼静かに並べられ「よく光ります」と書かれてをりぬ 野原亜莉子

人形制作者用の部品を売っている店らしい。ただ、人形の目玉をわざわざ「義眼」というのだろうか。なんとなく気味が悪いのも持ち味だろう。「よく光ります」の意外性が一首の魅力。

樹脂製のものばかりにて懐しい割れるコップと音立てる皿 十亀弘史

独房の日々を、ていねいに短歌にしている作者である。この作者ならではの発見があり、われわれがふだん気づかずにすごしていることがいかに多いかに気づかされる。第三句以下、とくに結句が、うまい。

短歌の現在

No.435

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

まだ硬い朝日を浴びて銀色に光るポデイーをしなわ
せる猫 森屋めぐみ

結句まで一首の主役が何だか分らない。「銀色の」光るポデイー」とあるので、読者は自動車かな、自転車かな、と思ったりする。第五句で猫とわかつて、「おっ」という気持ち。あらためて考えてみると、じつは「まだ硬い朝日」とあり、照らされているのは柔らかな何か、という伏線がはられていて見ているといいだろう。

春浅き川面にはねる鮭の稚魚旅ながかれど健やかな
れよ 小笠原政雄

掲載作のすぐ次の作「おちこちに波紋たてつつ下り行く稚魚の群追う光の流れ」と合わせ読むと、情景が鮮明である。川を下って海へ、そして北海道の沖合で他県で放流された仲間と一緒にたつて、六〇七月頃に餌の豊富な北洋へ。そして彼等は三、四年間の旅をして帰ってくるらしい。下句が表現するのはそんな旅である。

善良で無力ですという顔をして外務省ビルの前を過
ぎゆく 奥村知世

霞ヶ関の官庁街を歩きながら、警備の警察官の前を、疑われないように、権力とは無縁な庶民、平凡な一市民ですよ、といった顔して通ったの意味だろう。霞ヶ関の威圧的な空気に対する風刺を読む。

生い繁る笹に囲われ「外気舎」と書かれし小屋がほ
つねんとある 森部信次

かつて東京都下の清瀬市にあったサナトリウム「外気舎」の一部が記念館として残されている。外気舎とは、